

べっ甲資料館



今回は、墨田区横網にある べっ甲資料館を訪ねました。横網は、隅田川のほとり、両国国技館の近くにありますが、両国といえば相撲ですが、横網ではなく、横網（よこあみ）です。

べっ甲資料館は、磯貝べっ甲専門店の玄関脇にあるショーウィンドウです。小さいとはいえ、櫛、簪（かんざし）、笄（こうがい）などのべっ甲製品、それも江戸時代から昭和に至るまでデザインの変遷がたどれるような形で展示されていますし、制作に使う道具が展示されています。

また、磯貝べっ甲専門店の店内には、各種のべっ甲製品が展示されています。べっ甲は、べっ甲色と呼ばれる独特の色彩と深みのある質感から、古くから装飾品として使われてきました。正倉院の御物にも残されています。

べっ甲が、よく使われたのは、櫛、簪などの髪飾りとしてでした。べっ甲色、飴色ともいいますが、その色彩と質感は、アジア人の黒髪には特にマッチしたようです。江戸時代から昭和初期まで、日本髪で着飾るときにべっ甲の簪、櫛は欠かせないものでした。浮世絵などで、その様子を見ることができます。また、浮世絵からもわかるように、べっ甲細工が普及したのは江戸時代からとっていいでしょう。また、べっ甲はメガネのフレームとしても使われていますが、鼻の部分ではかけた人にフィットするといえます。また、繊維に方向性があるため汗にぬれても滑りにくいといえます。櫛や簪に用いられるのもこの特徴があるからです。



浮世絵に見る簪、笄

現在では、アクセサリーの素材として広く用いられており、磯貝べっ甲専門店では、時代にマッチした新しい製品をはじめ、べっ甲の特徴を生かした様々な製品を製造、販売しています。3代続く伝統の店ですが、初代の磯貝庫太氏は、現

べっ甲資料館の展示





在 101 歳でご健在とのこと。お訪ねした日は、2 代目の磯貝一さんにお話を聞くことができました。磯貝一さんは、すみだマイスターに認定された、べっ甲製品づくりの達人です。三代目は英之さん。現在 42 歳です。



上、べっ甲のアクセサリ 下 簪、櫛
いずれも、磯貝べっ甲専門店のホームページから 上は動画から引用しました

べっ甲（鼈甲）製品は、タイマイというウミガメの甲羅部分を素材としています。甲羅は背の部分から中央に 5 枚、両側面に 4 枚の 13 枚、さらにその側面に幾つかの小片で全体が形成されています。甲羅の 1 辺

ごとに微妙に色合いが違っており、ここから、べっ甲製品に見られるべっ甲色、あめ色、琥珀色と言われる艶やかな色彩、明度を作り出すのが、べっ甲工芸職人の技ということになります。

特に重要なのが、素材を丁寧に選別する「布あわせ」という作業です。素材（甲羅）の持つ互いの模様を合わせ、厚みや大きさを整えていきます。天然物のべっ甲を、このように色合い、形を整えるには、長年の経験と勘がものをいうことは容易に想像ができます。そして、熱を加え圧力をかけると甲羅の成分から膠（にかわ）質が溶け出し、接着剤の役目をして互いが溶けあい一体となります。べっ甲製品が複雑な形状の装飾品に用いられたのは、この加工のやすさがあったからでしょう。また、この性質により、破損した製品の修復も容易にできます。

表面のべっ甲特有の深い色合いとつやを出すためには、磨きをかける必要があります。これも磨くための砂を選択し、菜種油で混合するなど、経験と勘が大きくものをいう領域です。

詳しいものづくりの方法に関しては、言葉で説明するより、ホームページの動画で見ることができます。磯貝べっ甲専門店のホームページ <http://isogai-bekko.com/> から、ものづくりの動画をぜひご覧ください。

べっ甲の素材となるタイマイは、絶滅の恐れがあるため、ワシントン条約により輸入が禁止されています。現在、タイマイの甲羅は、これまで確保していたものを使っていますが、いずれ絶滅が予想されます。

そこで、日本でも材料が確保できるようにとタイマイの養殖を開始しています。現在、「ようやくある程度の大きさのタイマイを育てることができるようになった。これを使って試作してみると、なんとか使える見通しがつきそうだ」と、磯貝さんは言います。

絶滅の危機を養殖という方法で克服することで、べっ甲の世界は、また新しい可能性が生まれてきそうです。

(八代啓一)

べっ甲資料館 東京都墨田区横網二丁目 5 番 5 号 03-3625-5875

最寄駅：JR 両国駅 7 分、都営両国駅 3 分

<http://isogai-bekko.com/>